
身喰いの馬

麻生佳太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

身喰いの馬

【Nコード】

N2671Q

【作者名】

麻生佳太

【あらすじ】

病院で出会った美しい少女。しかし病気でその美貌は劣化してゆく。

(前書き)

気分を害されたらすみません。

僕はそう、生まれて来た時から、美しいものがひどく好きだ。とびきりに大好き。だからその患者が僕が居る病院に入院してきた時の、ときめきは今でもしっかりと覚えていいる。彼女の名前は齊藤志津香^{ずか}、満で十五歳だ。皮膚病の一種で入院して来たという彼女は、僕の先輩の担当下に置かれた。初診だけ、その変わった病状の見学の為に、僕と同僚とが一緒に加わった。

齊藤志津香は透き通る様な肌の白さに漆黒の髪。日本女子特有の凛々しさと涼しさを、併せ持っており、驚くほど美しく艶っぽかった。余りにも気に入ってしまった、僕は自分の担当でも無いと言うのに頻繁に病室に顔を出した。

彼女の症状は、皮膚がシーツやパジャマに触れるたんびに、アレルギー反応を起こして発疹を作り、やがてそれは膿を孕んで水泡となり、いつしか破裂してしまうというものだ。

最初は何故か顔を見に来て、話をしていくだけの若い研究員の僕に彼女は鋭い瞳で警戒した。でも外見が他の研究員より若く見えるのが、幸いしたのか、雪解けのようにこわばりは溶けていった。いつしか彼女は、僕を心待ちにするようになった。入った瞬間に僕を見るその目は安心に満ち溢れていた。でも、だんだんとそのパジャマの袖元をありったけ伸ばしたり、首元の合わせ目をきつくするようになっているのに気づいた。彼女のアレルギーは悪化していて、発疹の浸食は徐々に彼女の美貌を蝕んでいった。僕は医者だけれど、発疹も水泡もリンパ液も穢らわしくって大嫌い。十五歳の幼い彼女は確かに可哀想だけれども、僕の興味はどんどん薄れていったのだ。

＊ ＊ ＊

「井上先生」

呼び止められて、振り向くとその子供は軽く見知っていた。確かあの志津香の弟だとかで、何回か病室で顔を見合わせたことがある。確か…

「…和臣君、だったかな？」

「はい」

病室で会った時の彼の、和臣君の表情は、僕に対していつでも剣気に満ちていた。でも志津香が至極嬉しそうにするものだからいっしか彼の敵意も、諦めへと変わるのを見て取れたものだ。

「どうして」

身体は直立のまま、俯いて言葉を続ける。

「何故ねえさんの所を来てくださらないのですか？　ねえさんは待ってるんです、ずっと」

そこで顔を上げて懇願するように僕を見つめる。

「……担当医の僕の先輩に諭されたのさ、担当でも無いのに頻繁に顔を出すなんて自分の処置に文句でもあるのかってね」

勿論嘘だけれど。

「でも…貴方は診察に来られていたわけではないでしょう？　ねえさんに会いに来てくださったっていたものと。」

「そうだったけれど、色々と確執があるんだ、医者同士もね。…また目を盗んで見舞いに行くから」

それでは他の方の診察があるから僕は行くよ。軽く会釈して僕は方向をくると変えて、足早に廊下を進んだ。

「きっとですよ！！」

病院の廊下だというのに彼は大声を出した。

「だってもう時間がないんだ」

続いた言葉も病院内に響いたけれど。僕はもう振り向きもしなかった。

＊ ＊ ＊

僕はもう正直会いに行く気はなかった。看護師に聞いて確かめたらば、もう志津香はどんなものでさえ食べ物でも衣類でも、身体が拒絶してしまったのだという。ケロイドの様にただれた皮膚の面積は、酷くって、それで体力はほとんど消耗している。恐らくもう長くはないのだろう。もし彼女が亡くなってしまったら、僕は生前の美しい彼女の遺影に、とびきり綺麗な両手一杯の花を手向けよう。それから彼女のことはすっかり忘れて過ごした。だからその朝ものんびりと病院の廊下を歩んでいた。彼女がこの廊下沿いの病室に居ることすらすっかり失念していた。

背後で病室の扉が開く音がして、何気なく振り向くと彼女が立っていた。白かった肌はやっぱ赤黒く変わってしまっていて、ガリガリに痩せた手足にもう誰だかも分からなかったけれど、そのつり上がった瞳だけは変わらなくて、僕には分かった。斉藤志津香はひび割れた唇で、僕の名前を呼んだ。

「井上先生」

そして笑んだ。

もう動けないのだと知らされていた脚で、その何メートルかを必死で駆けて真っ赤に腫れた腕を僕に伸ばしたんだ。

うわぁ、やめてくれよ。なんといういやがらせだ。

擦り付けられた少女の頬から、血と体液が弾けて僕の頬にベタリと張り付いた。嫌悪感に僕が固まっていると流れ出る血液はそのままだに、志津香はどしゃりと僕から滑り落ちた。見下ろしたその表情は、安堵と幸福に満ち満ちていた。

「何で来てくれなかったんですか」

顔を上げると和臣が泣きながら走りよって来て、志津香を抱き起こした。彼女の吐息は、もう既に果ててしまっていた。

「待っていたのに」

「嘘だ」

「貴方のことが好きだったんです」

「うそだうそだ」

「うそつき！」

だってそうだろう？ 僕のことを好きだと言うならば、何で僕が嫌がることをするの？ 体中についた体液が息苦しくて僕は喘いだ。ほら今だって目元から頬を伝って：

「自分だって好きだったくせに、だって、貴方泣いているじゃあないですか」

言って和臣は大声で泣いた。

頬を伝っていたのは彼女の体液ではなくって僕の花だった。

(後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2671q/>

身喰いの馬

2011年9月1日03時24分発行